

未来を支える一人として

大阪市立大宮中学校 3 年 橋本 沙那

「未来ってどんなものだと思う？」そう聞かれたら、私は今年の春まで答えられなかったと思う。でも、四月に訪れた大阪・関西万博の会場で、その答えのヒントを見つけた。万博と聞いても最初はあまり関心がなかった私が、実際に会場を歩いてみて、社会のしくみや税金の役割まで考えるようになるとは思ってもみなかった。

まだ開催前で準備中の場所も多かったが、すでに未来の空気は感じられた。巨大なリング状の建物「リング」は、空を囲むように作られていて、まるで未来の都市に入り込んだようだった。なかでも特に驚いたのは、医療や環境に関する最新技術の展示だ。高齢者や障がいのある人を支えるロボットや、空気から電気をつくる装置など、教科書では見たことがない現実の未来がそこにあった。未来は遠い夢ではなく、いま目の前にあるのだと強く感じた。

しかし、そのわくわくと同時に、ある疑問が生まれた。

「このすごい施設や技術って誰が支えているんだろう」帰ってから調べてみると、国や自治体、企業、そして私たちが納める税金が使われていることを知った。私はこれまで、税金に興味を持ったことはなかった。けれど、あの未来的な光景の裏に、自分たちの社会が力を合わせてつくっている現実があると気づき、税金のイメージが大きく変わった。

税金は、「今の便利さ」だけでなく、「未来のため」にも使われている。道路や交通機関、公共施設など、万博に向けた準備の一つひとつが、地域の展開にもつながっている。万博が終わっても、それらは地域に残り、人々の暮らしを支え続ける。つまり、税金は、“未来を育てる投資”なのだ。使い方によっては、何十年先の人たちの役に立つものになる。そのことを私は、あの会場で肌で感じる事ができた。

私はまだ働いて税金を納める立場ではないと思っていた。けれど、普段買い物で払っている消費税も、立派な税金だと気づいた。つまり、私もすでに社会を支える一人なのだ。大阪・関西万博で見た未来の技術や施設の裏には、多くの人の努力と、私たちが納めた税金がある。そのことを知った私は、税金を「取られるもの」ではなく、「未来を育てる力」として考えるようになった。税金の使い道に関心を持つことは、自分の未来を大切にすることにつながっているのだと思う。そして、これからの社会をより良くするために、自分には何ができるかを考えるきっかけになった。大人になって本格的に税金を納めるようになった時、私はただ義務として払うのではなく、その先にある未来を想像しながら前向きに税と向き合っていきたい。